

失、退縮、内腔の開口などが16例中15例に見られ、延命効果では、その平均生存月数は13.3ヵ月であった。

YAGレーザー治療では、原発性肺癌9例、転移性肺癌4例、声帯腫瘍1例に施行し14例中8例にレーザー照射効果が見られた。本邦は手術療法、放射線療法、化学療法の補助手段になり得ると考えた。血痰患者330例についてその内視鏡的観察を行った。肺癌では、血痰を主訴としたものは13%あり、肺門部早期肺癌例はなく、進行例は多く見られた。今後、ハイリスクグループを対象とした肺門部早期肺癌の発見のための血痰外来の新設を計画した。

九州癌学会合同特別講演

癌に対するモノクローナル抗体

カリフォルニア大学(UCLA)

外科学教授

Dr. Paul I. Terasaki

1. 診療圏一保健所管内、一市四町における結核検診を利用した肺癌検診6年間の集計および今後のあり方

国立指宿病院外科

富加見章, 喜入 厚, 川井田孝同 放射線科

小林尚志, 中釜秀樹

鹿児島大学第一外科

三谷惟章, 田中俊正, 西 満正
当院診療圏における結核検診を利用し、2人読み方式にて行なった肺癌検診6年間の成果および今後のあり方について報告した。

2. 肺癌の診療からみた定期検診の役割と問題点

産業医大第二内科

山崎 裕, 加治木章, 宮崎信義
黒岩昭夫

同呼吸器科 青木恵美子

原田 進, 城戸優光

原発性肺癌79例を発見動機別に三群に分けTNM病期分類、レ線像、組織型などを検討するとともに可及的に過去に溯ってレ線フィルムを検討し、現在レ線を中心に行われている各種健診の果たした役割と問題点を探り、今後の健診のあり方について考察した。

3. 長崎市における肺癌組織型の疫学

長崎大学第一病理

井手政利, 峯 豊, 下川 功
岩崎啓介, 徳永茂樹, 増本英男
松尾 武, 池田高良

長崎市における原爆被爆と肺癌との関連性を調べる目的で、昭和48年から52年の5年間の肺癌罹患者435例を検討した。罹患者率は男女共被爆者の方が非被爆者よりも有意に高く、又組織型別割合では両者の間に有意の差はみられなかった。

4. 肺癌のCEA値に関する検討

福岡大学2外科

白日高歩, 元永隆三, 荒木康雄
切除肺癌を対象として腫瘍巢のCEA染色を行ない術前の血清CEA値、切除腫瘍内CEA値との対比検討を行なった。CEA染色は分化型腺癌で陽性に出るものが多かった。血清CEAとは必ずしも相関しなかったが、腫瘍内CEAとは相関傾向を示した。

5. 胸膜炎における血清CEA値の診断的意義について

熊本中央病院呼吸器科

衛藤安広, 中路丈夫, 木山呈荘
絹脇悦生

熊本大学第2内科 吉永 健
人吉総合病院内科

山田和彦, 前田一郎

対象は胸膜炎患者75例で、悪

性胸膜炎41例、良性胸膜炎34例であった。癌性胸膜炎の診断において、胸水細胞診に胸膜生検を加えた陽性率は50%であったが、胸水CEA 5 ng/ml以上の陽性率は75%で、三者を総合すると88.9%の陽性率となった。

6. 肺癌におけるCEA, B₂-MG, Ferritinの検討

九州がんセンター呼吸器部

野下貞寿, 石松豊洋, 宮崎一博
一ノ瀬幸人, 田中康一

原 信之, 大田満夫

三者の内、CEAのみ腫瘍マーカーとして有用だった。胸水CEAは、癌性胸膜炎診断の一つの指標となる。病巣気管支洗浄液中のCEAとFerritinは、ばらつきが大きく、肺癌診断の有用性はなかった。

7. 縦隔腫瘍における⁶⁷Ga-²⁰¹Tlシンチグラフィの評価

鹿児島大学放射線科

吉村 広, 田口正人, 島袋国定
城野和雄, 坂田博道, 小山隆夫
中條政敬, 篠原慎治

確定診断の得られた縦隔腫瘍(74例)の⁶⁷Gaシンチ(74例)と²⁰¹Tlシンチ(23例)を検討した。⁶⁷Gaシンチによる良・悪性の正診率は91%と高く、²⁰¹Tlシンチは、悪性病変や胸腺腫の描出において⁶⁷Gaシンチよりすぐれていた。

8. 肺癌副腎転移のCT診断

九州大学放射線科

平田秀紀, 西谷 弘, 鬼塚免雄
川波 喬, 小野 稔, 松浦啓一

肺癌の副腎転移をCTにて検索し剖検のなされた33例中CTにて副腎転移ありとし剖検にて転移を証明し得なかったのは3例で、うち2例はCT上副腎は大きく三角形をしており剖検では両側副腎の過形成を示していた。CTで副腎転移を検索する際、大